

フィールドワーク 舟城神社

2024 年 7 月 8 日

資料製作 山内順子

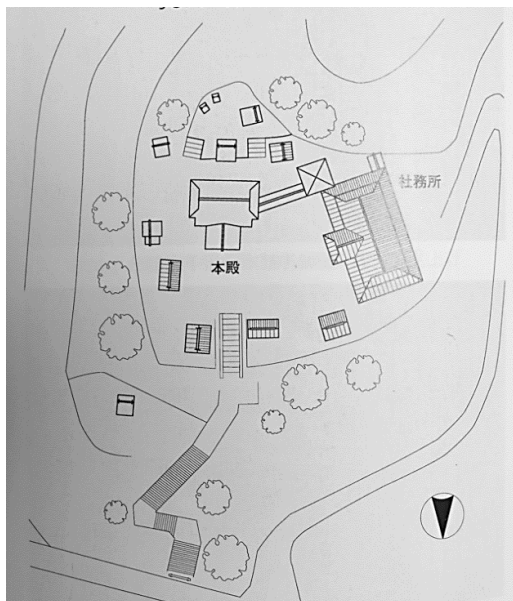
これまで歴史講座で学習してきた舟城神社について、現地で皆さまと一緒に確認をしていきたいと思います。

●建築 『丹波市の歴史的建造物Ⅱ』（平成 30 年 2 月 丹波市教育委員会）より



本殿 桁行正面三間 背面五間 梁間二間
 入り母屋造 ※寛延二年(1749)棟札
 向拝三間 中央間張出付 向唐破風造
 ※向拝張出部 安政四年(1857)足元金具

本殿は、入り母屋造の社殿で、正面に向拝とその張り出し部がついている。北面する珍しい本殿。
市内屈指の規模と質の高さを有する。



社務所

江戸時代には神社を管理運営していた《天王山覚王寺》の建物である。



本殿棟札

表面 奉建立祇園牛頭天王社 寛延元年八月二十八日柱立、寛延二年二月四日棟上
 天王村庄屋・八口口兵衛 長見村庄屋・善積伝右衛門 新才村庄屋 村井文右衛門
 天王山覚王寺 中興七世 堅者法印・快琳
 大工 播州多可郡塚口新田村 飛田平蔵藤宗義

側面 万治元年（1658）に先代の住職・教明が建立。今、寛延二年（1749）となり、約九十二年経ったので、再造立することになった。古宮の南の後ろの山を切り開いた。切り開いた人足は2800人、普請の人足は1500人で進めた。

裏面 二十ヶ村の役人が会合の上、建立について相談。当村の足立七太夫が銀壺貫目二十ヶ村で分けて十貫目余、米二十三石。境内の檜160本を売払う、黒井の山本左近右衛門氏の世話にて造立講で七貫目などで建設費用を捻出した。

本殿彫刻

作者は不詳ながら、技術・美意識とも卓越した彫刻で装飾されています。



《牛の神社》らしい牛の彫刻も。ただし梅花と牛は天満宮によく見られる組み合わせです。



側面からしか見えない手挟（たばさみ）には、孔雀や鳳凰など華麗な鳥と花々の組み合わせ。籠彫りという高度な技法での彫刻です。



背面にはゾウの彫刻がたくさん並んでいます。阿吽が交互に配されています。

●石造物

獅子狛犬

側面にある銘から《安政四年（1857）巳年三月、荻野新四郎紓吉さんを願主として、舟城神社にあったお寺の住職の覚良さんの時に奉納された》背面にある銘から《春日町野村出身の、石を加工・細工する職人である伊助さんが、こまいぬと台座を作った》とわかります。



正面：奉獻



側面：年号、願主、住職



背面：野村 細工人伊助

石燈籠

元禄七年（1694）、雨が降らずに困った時に《雨が降りますように》とお祈りしたところ、見事に降ったので、そのお礼に奉納した石燈籠です。「雫」という文字は、「あまひき」と読み、雨乞いをするという意味です。



げんろくしちりようしゅうきのえいぬ
元禄七龍集甲戌



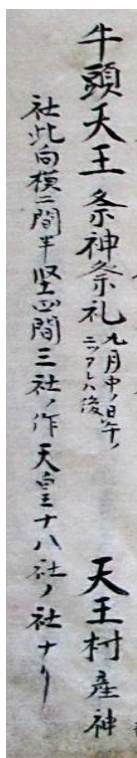
ほうきしんいしどうあまひきじょうじゆなり
奉寄進石燈籠雫成就之
けいはく
敬白

●ご祭神 牛頭天王(ごずてんのう)―病や災いを追い払ってくださる神さま―

『丹波志』は、寛政六年（1794）に成立した、丹波地域の地誌です。当時「牛頭天王」と呼ばれていたことがわかります。ところが、明治維新の際「昔から伝わっていた権現や牛頭天王など、仏教の用語が神さまのお名前になっている神社は申し出て、神社の名前も改めるように」という通達が出され、牛頭天王を祀る多くの神社名が

改められました。舟城神社も、この時に今の神社名となりました。しかし、牛頭天王であった時代の名残がなくなったわけではありません。最近、神社近隣のお家から見出された掛軸には「牛頭天王像」が描かれていました。蓮の花の上に足を載せた牛にまたがり、右手に宝剣・左手に如意輪を持たれた仏さまのお姿であるという、この地域独自の図像です。

境内にも、牛頭天王を表現したかと思われる屋根瓦などもあります。ぜひ、探してみてください。



『丹波志』
丹波市教育委
員会所蔵

掛軸に描かれた牛頭天王像
丹波市春日町船城地区の個人蔵



神輿庫(みこしぐら)の鬼瓦